

第 10 冊

『土偶のリアル』

譽田 亜紀子、山川出版社、2017年
(下)

3体の国宝土偶

前回に引き続き、[譽田亜紀子](#)さんの『土偶のリアル』から、土偶について学んでいきましょう。

一番新しい＝「仮面の女神」

3つめに紹介する土偶が、国宝としては一番新しい「[仮面の女神](#)」です。

[2014（平成26）年8月21日](#)、[縄文後期の仮面付き大型中空土偶＝「仮面の女神」](#)が国宝に指定されました。考古学的価値に加え、美術的な評価が高く、「縄文時代の土偶造形の頂点に位置づけられる」と評価されたのです。

この結果、[国宝の土偶を2体持つ自治体が登場することになりました](#)。その自治体とは、どこでしょうか？



写真はブログ『信州・浅間山麓から』から

答えは、長野県の茅野市です。

発見されたのは14年も前の2000（平成12）年8月23日のことです。場所は、八ヶ岳西麓の標高950m前後の尾根状台地に作られた中ツ原遺跡の発掘現場でした。驚くほど完成された大きな土偶が土の中から現れてきたのでした。

譽田亜紀子さんは『土偶のリアル』のなかで、次のように記しています。

中ツ原遺跡は約6000年前の縄文前期から約4000年前の縄文後期前半に人々が暮らした環状集落である。この土偶は、その中央に広がる墓域と思われる場所から見つかった。

ここに土坑墓（土に穴を掘っただけの墓）が密集しており、楕円形の坑が3つ並んだうち長径2.01m、幅1.05mの中央の坑に、頭を西に、脚を東にして土偶は眠っていたという。土偶用に掘られたと思われる直径50cm、深さ45cmの坑の中に左側を下にした格好で横たわり、その右足は胸部から外され、90度以上回転させた状態でともに埋められていた。・・・・・・・・

通常、土偶は壊れて発見されることが多い。その中であって右足以外はほぼ完全な形で見つかったこの大型土偶は特異な存在であった。

つまり、これらの条件を併せ持つ土偶はほかになく、発見と同時に「国宝級」という形容詞がつけられたのには理由があったのである。

「縄文のビーナス」のところで、「縄文のビーナス」は極めて珍しい状況で発掘された（ほぼ完全な形で発見されたり、横倒しにして埋められたりなど）ということを書きました。

ところが、「縄文のビーナス」が発見されてから10数年たって、同じ茅野市の別の遺跡からもほぼ完全な形をした**「仮面の女神」**が発見されたのです。しかも、上に書いたように「仮面の女神」も穴の底に、横倒しにして埋められていたのです。サイズは、**身長は34cm、体重が2.7kg**です。結構、大きいですね。

現在、長野県茅野市の**「茅野市尖石縄文考古館」**には、この2つの国宝土偶が保管されています。「縄文のビーナス」は縄文中期に作られましたが、「仮面の女神」は縄文後期に作られたものです。「縄文のビーナス」と「仮面の女神」とでは、1500年という長い期間の隔たりがあります。今から1500年前と言え、古墳時代の日本と言うことになります。それだけのタイムラグがあるのです。

こんな偶然ってあるのでしょうか？ 確かに場所は近いです。でも、1500年もずれているのです。

縄文時代と言え、埋葬法は「屈葬」が有名ですが、屈葬では亡くなった人を「横向きにして埋葬する」ということは、ほとんどないのではないのでしょうか。土偶だから横向きに埋めたのでしょうか？不思議なことだらけです。

もう少し、「仮面の女神」を見ていきましょう。顔は逆三角形で、立体的に作られた眉の先には丸い鼻があり穴も空いています。眉の脇には遠慮気味に施された、目なのか口なのか。顔の一番下にある小さい穴は口なんだろうが、これは可愛いですね。

後頭部にはキャッチャー・マスクを被ったような粘土の紐が編まれており、横から見ると、仮面を装着していることがわかります。身体的には幾何学模様がびっしりと描かれ、タスキ状に背面に続くデザインも非常に考えられています。そして膨らんだ腹部とその下にはっきりと確認できる女性器の存在から、女性をかたどったのは間違いないです。そして、両脚は異様に太く造られています。

でも、縄文の女神と比べてみると、「仮面の女神」には乳房が見えません。これは、上半身には服を着せられているから隠れているのかもしれませんが。上半身は服を着ているのに、下半身はスッポンポンです。そして何より、仮面を被っています。ただ、「縄文のビーナス」と同じように、表面はよく磨かれていて、ピンスポットの光があたって黒く光っているように見えます。

そもそも、**仮面状の顔をした土偶って珍しいものなのではないでしょうか？**

仮面状の土偶は主に縄文時代後期に見られる東日本特有のものなのだそうです。同時期のもので、長野県辰野町の新町泉水遺跡、山梨県韮崎後田遺跡から20cmの大きさの、仮面の土偶に似た土偶が見つかっています。

身体は空洞であり、放射線透過によって、頭部、首部、腕部、胴部、脚部が別々に作られた後、接合されていることもわかっています。また、中空であるため、焼き上げるときに内部の空気が膨張して破裂しないための工夫なのか、脚の下、股の間、首に穴が開けられていました。

ところで、なぜこの土偶は仮面を被っているのでしょうか？

作者の**豊田亜紀子**さんは、次のように指摘しています。

この集落に限らず、縄文時代には儀礼を司るシャーマンが存在したとされ、人々の心の拠り所になっていたと考えられている。シャーマンは病気が治るように祈ることもあれば、子どもが無事に生まれることを祈ることもあっただろう。彼らの生業である狩猟、漁労、採集が上手くいくように、自然の恵みが豊かであるように人々の願いを背負って祈りを続けたはずである。その際に使用した道具が土偶だと考えられているのだ。つまり、この土偶はシャーマンの相棒であり、場合によっては依り代にもなった可能性がある。そのためには、人ならざるものになる必要がある。つまり仮面は、人ならざるものの象徴として土偶につけられたとは考えられないだろうか。

その仮面を被った土偶が墓から壊されることなく、見つかったのだ。両脇に眠る人はシャーマン、もしくはこの土偶とともに暮らした人だったはずである。この土偶は代々この集落の守り神的存在として引き継がれてきたのではないか、という話もあるが、そう思わせるほど、表面がよく磨き込まれており、大切にされていたのが伝わってくる。と同時に、鈍く光る姿は、人々の祈りを背負ってきた自負と、見る者を圧倒する威厳を滲ませている。

「**人ならざるものになる**」ため仮面を被っていると筆者は考えています。「人ならざるもの」って、何でしょうか。考えられるのは「神様」とか「精霊」とかでしょうか。

「仮面の女神」を見ると、両手を大きく広げて力強く立っています。まるで、襲いかかってくる悪霊か何かを「止まれ」「やめろ」とでも言うかのように。

そこで、私もハッと思い出したことがあります。欧米の映画で悪霊などが襲いかかってきたら、十字架を高く掲げて退治をするというシーンを見かけますよね。ひょっとしたら、ムラのシャーマン（巫女）も悪霊や何かの怨念を退治したり、寄せ付けないようにするために、「仮面の女神」を両手に持ち（片手では重すぎると思います）、高くかざして呪術を行ったのかもしれない。

ほかにも、仮面をかぶって神になりすました巫女が、大地を踏みしめ、生産を阻害する害虫を追放する役目を担ったのではないかと考える学者もいます。害虫だけではなく、ムラの人々に害毒を与える邪気、災いの元を絶つことを願ったのかもしれない、という説もあります。

いずれにしろ、**仮面は「人ならざるもの」つまり「神」や「精霊」に「変身するための道具」**である、ということなんですね。

土偶＝呪術の道具？

最初に**譽田亜紀子氏**の『土偶のリアル』の文章を紹介しましたが、そのなかで**土偶を「呪術」に使ったのではないか**、という箇所が出てきました。

呪術って、なんか科学的じゃないし、現代社会に生きるわれわれにとって全然関係ないというか縁がない感じがしますが、そうとも言えないみたいです。

あなたは受験生の時に、天満宮さんにお参りして合格祈願の「お守り」をいただいてきませんでしたか？ これなんかも呪術の一種です。だって、超自然的な存在、目に見えないけれど神様とか精霊とかの力を借りて、願掛けをして、それが実現できるように祈るわけですから。

早稲田大学教授の高橋龍三郎氏によれば、呪術には2種類あるそうです。1つが「感染呪術」、もう1つが「類感呪術」です。

「感染呪術」とは、感染または接触の原理に基づくもので、一度感染・接触したものは、離れてしまっても一方から他方に作用を及ぼすことができる、という呪術です。ある人物が吸ったたばこを手に入れて、その人を呪う道具に使うというパターンがこれにあたります。

もうひとつの**「類感呪術」**とは、模倣することでこちらの願望を叶えようとするものです。例として話されていたのが「雨乞い」です。雨乞いするときには水をまいたり太鼓をたたいたりしますが、これは雷雨を模倣したものだといいます。ただ、もっとわかりやすいものに、「わら人形」がありますよね。今では小説や昔話でしか出てこないと思いますが、わら人形に五寸釘を打ち込んで呪った相手を殺す、というやつです。

昔の話かと思いきや、「貴船神社の奥の方に行くと、人物が写った写真が釘で木に打ち付けてあるのを見たことがあります」とどこかで聞いたことがあります。「えーっ、ほんとですか」となりませんか。

重要なことは、この**「類感呪術」に使われたのが、土偶であろう**、ということなんです。

もともと土偶というのは「完成品」です。ところが、ほとんどの土偶はわざわざ割られたり、壊されたりして、ばらばらに出土されますよね。**なぜ破壊されているのでしょうか？**

その答えが「呪術に使われていた」あるいは「何かの儀礼に使用されていた」ということになります。現在の子どもが「人形で遊ぶ」ように、縄文の子どもたちが「土偶で遊んでいた」とは考えないわけです。

問題は、なぜ土偶が壊されているのか？ いや、なぜ縄文の人々は土偶を壊したのでしょうか？

高橋龍三郎教授によれば、考古学者の意見はだいたい2つに分かれるそうです。

1つは、手足などがもぎ取られたりしているのは、手の病気や脚の病気の除災である、というもの。つまり、手の病気や脚の病気などの災いを無くすために祈るというのですね。その時に土偶を使うということになります。

つまり、人間の手の病気・怪我がなくなるように土偶の手をもぎ取るわけです。病気や怪我が治るように祈るわけですから、良いことが起きるように呪術を行うので、これはいわゆるホワイト・マジック（白魔術）と呼ばれるものです。

もう1つが、「わら人形」のように、誰かを念頭に置いて、「〇〇の手が折れてしまえ」とか「〇〇の脚が病気になれ」というふうに、相手を呪って悪い結果を期待するのですが、これはブラック・マジック（黒魔術）と呼ばれるものになります。

そして高橋龍三郎教授は土偶は黒魔術として使われていた可能性が高い、と考えられているようです。その根拠としてパプアニューギニアの調査の例を挙げておられます（ここでは割愛しますが）。

さて、あなたは、土偶が呪術の道具だとして、ホワイト・マジックとして使用されたのか、それともブラック・マジックとして使用されたのか、どちらだと思いますか？

私は、縄文時代を美化するわけじゃないけれど、ホワイト・マジックの様な気がしてなりません。発見されている土偶のほとんどが損壊しています。ですから、きっと儀式などで呪い（まじない）の道具として使用されていたと思います。

土偶をわざと破壊することで、誰かの身の安全を願っているように思います。つまり、例えば妊婦さんが無事に出産できるように、あるいは病気や怪我をした人の病気や怪我を土偶の中に封じ込めて、破壊することで無事に出産したり、病気や怪我が治ると信じていたのではないのでしょうか。

そして、誰が祈るのかと言えば、このムラのシャーマン（巫女）でしょう。「縄文のビーナス」「縄文の女神」「仮面の女神」など大きめで、しかも自立する土偶はシャーマンが長年にわたり、ひよっとしたら何代にもわたり「呪い」の道具として、愛着を持って使用してきた土偶なのでしょう。

そして、時にはムラの中央あたりに飾られて村人たちの目に触れたり、手で触れたりしたのかもしれませんが。だからこそ、ほとんど壊されずに「埋葬」するかのよう埋めたのではないのでしょうか。

アニミズムとシャーマニズム

さて、この頃つくづく思うのは「縄文人」（縄文時代に日本列島に生きていた人々、という意味です）は現代に生きる私たちの「祖先」になりますから、「縄文人」や縄文時代を探求することは、自分自身のルーツを探ることになるのではないかということです。

日本人について、あるいはそのルーツについて考えるとき、「縄文人」「縄文時代」を理解しないといけないのではないかと思うようになりました。日本人は無宗教な民族と言われることが多いですが、全く的外れだと思えます。

なぜなら、「縄文人」が土偶を作ったり、土偶に何かを託したり呪術を行ったりする文化や習俗は、現代の日本人にも脈々と受け継がれていると思うからです。

例えば、神社に行って「合格祈願」や「良縁祈願」「安産祈願」をするのもそうですし、愛宕神社の「火廻要慎」というお札を台所に貼ったり、玄関先に祇園祭の「粽（ちまき）」を飾るのも「災厄が襲ってこないように」祈る習俗ですよね。あるいは、葬式からの帰りに自宅に入る前に塩を足元にかけて「浄める」ことをしたり、大相撲で土俵に塩をまくのも土俵を「浄める」目的ですよね。

「いただきます」という言葉もそうですし、最近では世界共通語になったような「もったいない」という感覚や言葉も、「節約しなければならない」ということだけではなく、食べ物や使っているものに対する「敬意」の念が示されているように思います。

これらの習俗が「いつから始まったのか」を証明することは、ほとんど不可能でしょう。でも、私は「縄文人」の頃からずっと続いている習俗・文化のような気がしてなりません。なにせ、縄文時代は1万年も続いてきましたから、我々日本人のDNAの中にしっかりと組み込まれていると思うのです。

「縄文人」の信仰って、どんなものだったのでしょうか？

「縄文人」はあらゆる自然現象や森や樹木など万物に「精霊」「靈魂」が宿ると考えていました。こういう信仰を「アニミズム」「精霊信仰」と言いますね。そのため、狩猟などの生産活動に伴う儀礼や、人生の節目における通過儀礼などを行っていました。

我々は食べ物を自然から得ています。ですから、食べ物をもたらしてくれる海や川や山に拝んだりします。「これまでありがとうございます」「これからもよろしくお願いします」と祈ること、つまり感謝とご挨拶をすることで、自然と調和してその恵みで豊かに生活できる、と考えたのでしょう。

そして、その感謝やご挨拶という儀礼が「祭り」ではないでしょうか。

アニミズムとは目に見えない「精霊」「霊魂」「神様」や自然の脅威に対して畏怖の念を持つとともに、畏敬の念も持ち合わせていました。

日本人は食事をする際に「いただきます」と言いますが、なぜ「いただきます」というのでしょうか？

お米などの食べ物を作ってくれた農家の方に感謝しているのでしょうか？ 食事を作ってくれた方に感謝しているのでしょうか？ もちろん、それもあると思いますが、本来の目的は違いますよね。

我々人間が農作物や海産物・動物などを食べる（いただく）ことで、「今日や明日に命を繋げていけることができる」ということを自覚し、食べさせて頂いた農作物や海産物・動物などの命に感謝するための言葉が、「いただきます」という言葉ですね。

そういえばアイヌ民族の「イオマンテ」という儀式をご存じでしょうか？アイヌの人たちは「熊」のことを「神様が肉と毛皮をもってきた贈り物」として大切に育て、やがてその熊を屠殺して、肉と毛皮を受け取り、天界へ返すという儀式をおこなっていました。

人間は生きていくために、様々な「命」を頂きます。頂いた命に対して敬意と感謝の念をあらわすのが「イオマンテ」なんですね。

アイヌの方が行う「イオマンテ」の「簡略版？」が「いただきます」や「ごちそうさま」と言ったら良いのでしょうか。

さて、このアニミズムの信仰は次の段階に進んでいきます。我々人間の力ではどうすることもできないことを「精霊」「霊魂」「神様」に祈って実現してもらおうとする信仰です。

そのためには「祈り」の道具が必要ですし、「精霊に祈る人」も必要になります。この「精霊に祈る人」こそシャーマン（呪術師）です。そして、自然への畏怖心から超自然的な力を持つシャーマンの力を借りようとしたり、シャーマンの力で問題を解決してもらおうという考え方をシャーマニズムといいます。超人間的なシャーマンは、時には踊ったり、呪文を唱えたりして、「精霊」「神様」にお願いし、「精霊」「神様」の声をムラ人たちに伝える役割を果たしていたのでしょね。

そして、このシャーマンが使用していた大切な道具こそ、土偶だったのです。

私は寺社仏閣を巡るのが大好きです。そうやって散策していると「針供養」「人形供養」「櫛供養」などの儀式に出会うことがあります。針や人形、櫛といった「もの」を「供養」、つまり「葬式をあげる」ということを日本人はします。あなたは不思議に思ったことはありませんか？なぜ、人形を供養するのでしょうか？

これも縄文人のアニミズムの信仰と結びついているような気がします。日本人は「もの」には「精霊」「靈魂」が宿っていると考えるから、ものを大切にします。「もの」は単なる人工物ではありません。生き物と同じように魂を持っていると考えるのですね。

ですから、日本には「針供養」「人形供養」「櫛供養」などのように、ものを供養する風習があるでしょう。日常生活や仕事でお世話になったものを簡単に捨てたりせず、人と同じように葬式を執り行うというのは日本人ならではの風習だと思います。

そして、そのルーツが縄文人の信仰なのだと思います。

合掌土偶と中空土偶

さて、最初に国宝の土偶が5体あると紹介しました。そして、私が実際に見た3体の土偶を詳しく見てきました。

まだ、2体が残っています。下の写真左が「合掌土偶」、右が「中空土偶」です。簡単に紹介しておきましょう。



合掌土偶



中空土偶

両方とも
ウィキペディア
より

祈る？出産？「合掌土偶」

上の写真の左側が「合掌土偶」と呼ばれているものです。縄文時代後期（前2000年～1000年）の土偶で、青森県八戸市風張1遺跡で出土し、**八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館**に保管されています。

発見されたのは、1989（平成元）年7月、是川遺跡の対岸に位置する**風張1遺跡**の発掘調査の時です。第15号竪穴住居跡の出入り口から向かって奥の北壁際から出土し、右側面を下にして、正面を住居中央に向け、背面は住居壁面に寄りかかるようにしていたそうです。また、出土時に欠けていた左足部分は、2.5m離れた西側の床面から出土したそうです。

土偶は、一般的に捨て場や遺構外からの出土例が非常に多いのに、**住居の片隅に置かれた様な状態で出土**した例は非常に少ないといえます。

両膝を立てて座り、手のひらを合わせた姿の土偶で、他の土偶には見られない非常に珍しい姿であること、良い状態で発見されたこと、土偶の形状が当時の風俗を考える上で極めて高い価値をもつことなどから、**2009（平成21）年3月19日に、国宝に指定**されました。

実は、この合掌土偶は「一番人気」と言ってもいいくらい人気が高いそうです。サイズは、**高さが19.8cm、幅が14.2cm、奥行きが15.2cm**です。

ぱっと見て、**この土偶は男性ですか？女性ですか？何をしているように見えますか？「祈っている」のでしょうか？それとも「子どもを産もう」としているのでしょうか？**

上の写真を見る限り、男性が祈っているようにも見えますが、**細部を見ると、間違いなく女性です。**ですから、赤ちゃんを産もうと、息んでいる姿ではないかという意見もあります。顔の表情が豊かで、特に口が面白いですね。

「チュー」を求めているようにも見えるし、誰かに文句を言っているようにも思えます。それとも「産まれる！！」と息んでいるのでしょうか。

実は、調査によって、全身に赤色顔料が塗布され、割れた部分には天然の接着剤であるアスファルトで修復した痕跡が残っていることがわかっています。ということは、赤の合掌土偶ですから、けっこう目立っていたでしょうね。

日本最大の「中空土偶」

上の写真の右側が「中空土偶」と呼ばれるもので、縄文時代後期（前2000～前1000年）に作られ、**北海道函館市著保内野遺跡**出土、現在は**函館市縄文文化交流センター**に保管されています。

1975（昭和50）年8月、函館市南茅部地区でジャガイモ畑で農作業中に発見されました。地表から30cmほど下から出てきたこの土偶は、6つに割れており、両腕はなかったそうです。発見から32年後の**2007（平成19）年**には、その大きさや装飾の素晴らしさ、焼きの精度を上げるための両脚を繋ぐ管の工夫など、考古学的・美的な価値から、**北海道唯一の国宝**となりました。

サイズは、**高さ41.5cm、幅20.1cm、重さ1.745kg**。中が空洞となっている中空土偶の中では、**国内最大の大きさ**です。正面を向いた顔、左右に大きく張った肩、くびれた胴、長い両脚で均整が取れた極めて精巧で写実的な作りで、表面もよく研磨されているとのこと。

南茅部の「茅（カヤ）」と、中空土偶の「空（クウ）」を合わせて、「茅空（カックウ）」という愛称で親しまれ、その穏やかな表情、美しいボディライン、巧みな幾何学模様などから、地元では「北の縄文ビーナス」として人気を集めているそうです。

この土偶はぱっと見たところ男性ですが、よく見るとやはり女性です。中空土偶が国宝になっている理由の1つは、**下半身のデザインが素晴らしい**ということです。薄さ2ミリという部分が脚にあるのですが、割れずに残っていたのが奇跡です。写真で見たらわかるように、腕のあたりが欠けているので内部がよく見えるそうです。口やおへその周りにボツボツがありますが、入れ墨ではないかと考えられています。

以上、国宝の土偶残りの2体を足早に見てきましたが、正直、ホンモノを生でゆっくり見たいものです。京都の国宝展でも3体の土偶を見ましたから、その時の実感が思い出されます。でも、たくさんの人がいたので時間をかけてじっくり見ることはできませんでした。

まして、「合掌土偶」と「中空土偶」には出会えてないので（写真を見るだけなので）、土偶の持っている「息吹」とか「訴え」とかを感じ取りにくいですね。

是非、会いに行きたいものです。

終わりに

譽田亜紀子(こんだあきこ)さんの『土偶のリアル』を中心に、縄文時代の土で作られた人形「土偶」について見てきました。今回紹介した「国宝の土偶」のようにほぼ完全な形で出土したものは例外中の例外と言ってもよいということをご存じだと思います。大半は粉々に割られ、1つに合体しようとしても、全然接合できないものが圧倒的に多いです。

ですから、今回紹介した「国宝5体」で土偶のことが全てわかることにはなりません。ましてや、縄文時代のことを土偶だけで理解できるわけでもありません。ですから、興味のある方は、[譽田亜紀子さんの『土偶のリアル』](#)やほかの著書を読んでみてください。

「土偶」を通して、「縄文人」や縄文時代のことについて、少しでも理解や認識が深まれば嬉しいですね。そのためにも、多くのことを学ばせていただいたのが[譽田亜紀子さんの『土偶のリアル』](#)(プラス[三上徹也氏の『縄文土偶ガイドブック』](#))でした。